

「社員全員の農業技術力ベースアップに活用」

農業法人 株式会社サラダボウル
農場長 土壌医 小俣康洋

1. プロフィール

農業法人（株）サラダボウルは、甲府盆地の南端に位置する山梨県中央市にあり、総面積 1.6ha ほどの施設栽培でトマト、キュウリ、ナス、葉物野菜各種を、総面積 7ha ほどの露地栽培でナス、ブロッコリーと里芋などを生産しています。有機培地を利用した隔離養液栽培にてトマトの試験栽培も一部行なっていますが、基本的には土耕栽培を主体に、トマト班、ナス班、露地班の 3 班構成で生産に取り組んでおります。2019 年 6 月時点での従業員数は 10 名で、他に技能実習生 4 名、パート従業員 13 名で生産活動を行なっております。



写真:キュウリ栽培圃場での筆者

2. 土壌医検定試験取組みの動機

弊社では周年で野菜生産を行なっていますが、1 2 月～2 月の比較的時間がとれる期間に社員による自発的な勉強会を毎朝実施し、社員全員が参加しています。この自主勉強会はサラダボウルの伝統のひとつとなっており、毎年テーマを決めて、毎朝 1 時間 3 ヶ月ほどみんなで勉強します。これまでも様々な書籍を参考図書（例；「生きている土壌（エアハルト・ヘニッヒ著）」）として勉強会で取りあげてきました。

土壌医検定試験への会社としての取り組みは 3 年前に遡ります。平成 28 年 11 月初旬頃に弊社代表の田中から土壌医検定試験の存在を聞かされ、勉強会のテーマとして最適だ

と考えました。検定試験のため、知識水準を客観的に評価できることはメリットであり、明確に合否が決定されるということや合格に向けて 3 ヶ月という短期間に知識を頭に刷り込むことができるが目的に合致していました。弊社は、工業高校出身者や異業種の農外企業からの転職者まで非農家出身の様々なバックグラウンドを持った社員で構成されていますので、土壌医検定試験などを活用するメリットは大きいと考えました。

3. 農業法人の生産管理面での活用

農業法人として、生産部門には収量や秀品率、売上などの目標値が設定されますが、この目標値を達成するための生産技術は一定

不変のものではなく、日々変化します。特に、農業の世界においては環境の影響を受けるので、目標とする結果を達成するためには、その環境の影響度を少なくする管理や創意工夫をしなければなりません。各作期の日々の作業の中で繰り返される仮説と検証から生産技術は作られていきますが、この日々の仮説と検証は基礎的な知識があってこそ可能になります。また、社員同士で共通の課題に取り組む上での共通言語としても基礎的な知識は必要になります。生産技術と一言で言っても、栽培技術を中心とした広範な技術体系です。学ばなければならないことはたくさんありますが、特に作物体からみた地下部の環境や現象を理解し、ベースとなる知識体系を学ぶ手段として、我々はこの土壤医検定試験を有効に活用しています。

勉強会での取り組みも3年を終えました。おかげさまで、社員12名全員が土壤医検定を取得しており、1級取得者1名、2級取得者5名がおります。日々の現場で課題を話し合う場面においても、土壤医検定試験で学んだ知識が活かされていることを実感し、とても

たのもしく感じています。限られた土地での生産ですので如何に連作障害を少なくするかの戦いです。今まで当たり前のように行ってきた緑肥栽培や作換え時のプラソイラー一つをとってみても、意思を持って作業を行えるようになったのはとても大きいことだと思っています。我々生産者は、畑で結果を出さなければならぬ技術屋です。理論を学んでも畑で活かさなければ意味がないということ肝に銘じて、今年も土壤医検定試験を活用して社員全員のベースアップを地道に行いたいと考えています。



写真：リーフレタス栽培圃場